

北京の郊外—郊外電車に乗ってみる

引率教員 浅野 純一

2009年度のアジアフィールドワーク（北京）は、9月の初旬に実施された。

まず、簡単に日記を抄録しておく。

2日（水）：午後4時、北京着。旅行社案内のレストランで「上海料理」の夕食。その後建国門外の凱萊飯店というホテルに投宿。

3日（木）：午前中は、土地勘を得るためにホテル近辺を散策。多くの学生は、地下鉄で一駅の北京駅まで行って、歩いて帰るというコースを選んだようである。お昼は、ホテルでバイキングの昼食。午後から、全員で天安門広場・故宮を見学し、故宮の北門「神武門」に集合、解散して各自夕食を取って帰宿する。多くの学生は教員と一緒に故宮の北に位置し、故宮を一望できる景山公園に上った。地下鉄・天安門広場・故宮などの入り口では、昨年（08年、オリンピック終了後パラリンピックが開催されていた）ほど嚴重ではないが、いちいち鞆の検査がなされていた。検査員は、警官と「志願者」（ボランティア）の学生であった。また、天安門広場では旅行社が手配した記念写真を撮影したが、昨年度の学生はみなこれを購入したのに、今年には誰も購入しなかった。100元（約1300円）である。

4日（金）：午前中は各自自由行動・調査。浅野は、演劇をテーマとする学生3人を連れて、国家話劇院（話劇とは日本で言う新劇に相当する）に、演出中心（演出センター）主任の劉鉄剛先生をお訪ねした。司会と通訳を兼任する形で十分な記録はできなかったが、以下に劉先生のお話の概要を抄録しておく。

劇団の構成、演劇の存在価値、小劇団の様子、国家話劇院の現状、若者文化、中国の文化状況、など多岐にわたって話を聞く。おっさんのぼやきも多かったが聞くべき内容もあった。

演劇は観衆を意識して制作されるべきこと、例えば、中国人向けの演劇では、和服を以て日本人の記号とし、アメリカ人向けの演劇なら辮髪を以て中国人の記号とすることも可である。しかしテーマは社会の文化状況に影響しうるものであるべきで、同性愛などとするに足らない社会現象は自己満足の範囲をでない。

今わたしが関心を持っているのは、学生自殺の現状、若年層に対する社会の圧力であり、これを台本に作りたい。若年層は勉強、習い事、スポーツなどあらゆる可能性を押しつけられている。にもかかわらず「80後」の世代（80年代以降に生まれた世代の意、先生の娘さんもこの世代）には、アインシュタインはアメリカの歌手、東条英機は日本の化粧品などと答える歴史音痴が多い。

アメリカの大統領選挙や日本の政変は、非常に細かに中国に伝えられていて、中国人はこれをまるで我が事のように見て、床屋談義をして世界政治に参加している気になっている。基本的に中国はまだ貧困な国家である。バスで1時間も郊外に出れば、農民の生活を見ることができるのだから、中国に研修に来たなら、是非そういうところを見ておくべきだ。

劇院も組織としては貧乏だが、構成員は外の仕事で随分裕福である、数日間で年収分を稼ぐこともある（廟窮和尚富）。などなど。

この日の午後は、中央民族学院の日文系（日本語科）の学生と全員で交流した。これは昨年

と同様、学生も楽しそうだったし、同年齢の中国人学生が流暢に日本語を操るのを目にして、刺激も受けていた。

夜全員で、便宜房という店で名物の北京ダックを頂いてから、京劇を鑑賞した。ただ交通渋滞などもあって、食事時間が30分ほどしかとれなかったのが残念である。

5日(土):終日、(万里の)長城と明の十三陵を見学。夜は各自で食事。観光ではあるが、これは外せないメニューであろう。昨晚便宜房に腕時計を忘れた学生がいて、夕方取りに行ったらきちんと戻ってきたという。

6日(日):終日団体行動。午前中は胡同(横町)を参観して、班に分かれて家庭料理を頂く。昨年と同様、この食事は好評であった。浅野が参加した班では、単純なキャベツ炒めが大好評であった。キャベツ自体がおいしいのだ。しかし学生がいろいろ質問しようとしなのが、引率としては寂しい。

午後は、北京南西郊外の宛平にある抗日博物館と蘆溝橋を見学。博物館の展示は、些かどぎついものであり、また日本人の目から見れば偏向もしているが、すでに「90後」でやはり「歴史音痴」の学生には、インパクトがあっていい経験であるだろう。ただ、館内の感想ノートを見てみると、汚い言葉で日本(人)を罵倒する書き込みばかりで、以前の「反日」騒動を思い出して暗澹とする。

夕食は、四川飯店で四川料理を頂く。この晩は、来る建国60周年記念式典の予行演習のために大規模な交通規制が実施されて、長安街は封鎖、二環路もほぼ封鎖、三環路は大渋滞、大幅な遠回りとなる四環路経由で一時間以上かけて帰宿。車も人も長安街へは近づけない。夜、部屋の窓から見ていると、百台を超えるバスが二環路を一時封鎖して、建国門から長安街へ、北京駅経由で天安門から出てくるバスも同じく、街灯をいつもより落とした長安街は西からミサイルとおぼしき軍事車両がつぎつぎ天安門に向かっていった。

7日(月):終日自由行動・調査。浅野は午前中部屋で待機し、昼前から旧職場である北京日本学術センター(北京外国語大学内)へ行って、元同僚たちと久闊を叙す。昼食後、郊外電車の小旅行(後述)。夜は、数名の学生とホテルの裏手にあるウイグル料理を食べる。ここには何軒かウイグル族の経営する料理店があり、羊肉串(シシカバブ)を戸外で焼く香ばしいにおいが充満しているが、中国になれていない人には入りにくいだろう。店では15歳と自称する、どう見ても小学生が働いていた。

8日(火):終日自由行動・調査。浅野はKくんに付き合っって白雲観(観は道教の寺院)を参観する。お昼時、道士が昔ながらの食器(かつては琺瑯だったが今ではステンレスになっている)を手に手に持って食堂に行き、ご飯の上におかずを盛って歩きながら食べるという、前世紀に中国体験をしたものにはなつかしい光景に出会う。我々は、観の外に出てウイグルスパゲティを頂いた。北京には、小規模なウイグル人街が点在している。ちなみに中国は、インドネシアに次いで世界で二番目にイスラーム教徒の多い国である。

午後は、Kくんと別れて、瀋家園でお土産を買う。夜は、全員集まって広東料理を頂く。

9日(水):帰国。6時にロビー集合であったが、例年と違ってほぼ時刻通りに全員集合した。ネット接続代の二重請求などがあったが、説明したらそれで済んだのがうれしかった。全員無事帰国。

事故などトラブルはなく、その点は良かった。しかし、問題もある。

まず食事であるが、7回の夕食のうち宛がい扶持が4回、これはもともと中国の料理のうち代表的な4種（北京・上海・四川・広東）を経験してもらおうという趣旨ではあったが、物価の高騰もあるだろうがだんだんと特色のないものとなってしまっている。再考の余地があろう。一方で中国の大都市でもファストフード店がずいぶん普及して、各自で食事をするときには、多くの学生がこれらの店で済ますという状況である。もとよりあまり衛生的でない店や、屋台のものを買い食いするのは問題もあるが、熱々のものを出す店であれば食中毒などの心配はまずない。難しいが、いかにももったいない話である。

それから、調査の目的である。これはひとえに春学期の授業にかかわることであるが、半期のうちに調査の目的をはっきりさせるというのは、かなり難しい。北京について、中国についての基礎的な知識がないため、興味の対象を絞りにくいのである。勢いなじみのあるファストフード店の調査などということになる。これは、卒論についても見られる傾向であり、本質的な問題である分、解決も難しいけれども、南京の中国語現地演習とも関連させて考えていく必要がある。思いつきのアイデアをあげておけば、実施を隔年にする、参加資格を3回生以上あるいは中国語の中級履修者に絞る、実施先を別の都市に変える、現地演習経験者のみとする、調査課題を教師の方から指定する、などそれぞれ一長一短があろうが、備忘のために記しておく。

さて、北京近郊小旅行について。

北京の地下鉄は現在、1, 2, 4, 5, 8, 10, 13号線、八通線、機場線の9路線があるが、このうち4号線は09年9月28日開通なので、われわれが北京に滞在した折にはまだ開通してなかった。にもかかわらず、駅によっては、あるいは車両によってはすでに開通しているかのような路線図が掲示されていて、困惑した。というのも9月7日に訪問した日本学研究センターへは、西直門から4号線に乗り換えるのが便利だったからである。西直門に行ってやっと開通が28日であることがわかったわけで、むろん気をつけて見ていればどこかにそういった情報は見いだすことができたであろうし、北京に住んでいる人にとっては常識に属することで、ことさら不便でもないだろうが、お上りさんにはやはり不親切である。

にしても、かつて私が北京に住んでいた90年代半ばには、長安街に沿って東西を貫く1号線と二環路の地下を走る2号線しかなかったのだから、今世紀に入ってずいぶん発達している。で、これらの新しい路線は、「地鉄」と言いながら、かなりの部分は地上を走る郊外電車である。

今回乗ってみたのは、北郊を西直門から東直門まで半円を描くように走る13号線と、南北を貫く5号線である。

上述の劉先生のことばに刺激されて、北京の郊外を一目見てみようというわけである。

9月7日、北京日本学研究センターを訪問後、最寄りの五道口駅から13号線で北上してみた。初めのうちは西直門から八達嶺に向かう鉄道と平行して北上する。ヘッド（運転間隔）はほぼ5分。料金は一律2元、磁気カード式の切符。五道口から二駅目の西二旗駅を過ぎてしばらくすると、鉄道から離れて東へ向かう。劉先生の言葉から、勝手に農村地帯を想像していたのだが、畑地は駅と駅の間になぜか残るのみ、駅ごとにマンション群が林立する郊外となっていた。それもそのはずで13号線は比較的早く03年の正月には開通していて、すでに6年余り経っている。

日本では電鉄会社が沿線の住宅開発と新線建設をセットで行ってきたが、北京の場合、この新線建設と住宅開発はどのようにリンクしているのか、興味のあるところである。それにしても、驚くべき早さで開発が進められていることは間違いない。また、ほとんどはマンション＝集合住宅であるが、なかには一戸建ての団地もあり、これは日本のそれに比べると一戸ごとが、敷地建物ともに広く木立が多い。一戸建ては言うまでもなくマンション形式の集合住宅にも駐



車場が付いているのは、日本と同じで（むろん一戸に一台確保されているわけではなさそうだが）、北京の自家用車増加が伺われる。

そうしたことを書きながら、ふと思いついて google 地図の航空写真で当該地域を見てみると、上に述べたような様子が手に取るように分かる。と同時に、おおむねこの 13 号線を境に、内側は農地のない完全に都市部、外側がマンション群と旧来の鎮（平屋か 2 階建ての住宅が密集し、なかには伝統的な四合院も見られる）、農地が混在する郊外地域となっている。13 号線の営業キロは 40.8 キロメートル、これを大阪郊外に置き換えてみると、伊丹市から国道 171 号線を高槻まで行ってさらに外環状線を四条畷あたりまで下がるとほぼ同じ距離になる。それを念頭において再び google 航空写真で我が 171 号線に沿ってみると、似たような特徴が見て取れるのである。

もちろん大阪の場合は、かなりの時間をかけてじわじわと都市部が郊外の農地を浸食していったであろうし、電鉄会社による宅地開発も多くは一戸建ての団地であったこと、千里丘陵などの高低のある地勢を考えれば、北京に比べてかなり乱雑に見えるのは仕方ない。北京は、ほぼ平坦な土地が続き、しかもこの 10 年ほどで一気に開発されたもので、その分整然としているのだろう。

さて、地下鉄という名の高架を走る郊外電車で行けるところまで行ってみようと思って、立水橋駅で交差する地下鉄 5 号線に乗り換えて北に向かった。立水橋駅から北に天通園南、天通園、天通園北の 3 駅がある。この天通園というのは東西約 3 キロ、南北約 2 キロの大マンション群である。約 20 階建てのマンションが 200 棟（半ばはまだ建設中ではあるが）として、1 棟 1 階あたり 8 部屋とすると、一棟あたり 160 室、全体で 32,000 室、1 室に夫婦と子供一人が入るならば、完成した暁には約 10 万人の都市ということになる。私が訪ねたのは平日の昼間で、さすがに人通りは閑散としていて、電車もほぼ席に座ることができたけれども。

この北京のほぼ中心を南北に貫く 5 号線の開通は北京オリンピックに間に合うように、ということで 2007 年 10 月である。天通園団地の開発もそれに合わせて始まったものであろう。駅前には、大型ショッピングセンターのための土地が確保されている。大型クレーンが林立しているさまは壮観である（写真）。



天通園北駅が今のところ5号線の最北ターミナルである。天通園の団地からやや離れるため



に視界はいい。街路樹越しに天通園団地を望むと20階以上のビルであることが分かる。また、この駅の駅舎から西を望むと、緑に囲まれた新築一戸建ての団地があるの分かる。ニューリッチと言われる人々が住むのだろう。13号線の外側なので、遠くの西山も望める。北京が三方を山に囲まれた盆地状の要害であることを思い出させる風景だった。

またこの駅は、さらに北へと続くバス路線のターミナルでもある。劉先生の言う農村部は、ここからバスに乗り換えていかねばならない(下の写真の左手が、郊外行きバスターミナル)。

駅前には、たくさんの小吃(中国伝統のファストフード)の屋台店が並んでいる。写真中央の白い看板には「鶏蛋灌餅一元伍角(鶏卵入り中国風クレープ1.5元=約20円)」と書いてある。これらの店を出している人々は、おそらく団地の住民ではなく、周辺の小鎮に济む農民などであろう。このあたりは、日本の郊外駅の立ち食いそば屋に相当するのだが、雰囲気はかなり違うところである。



時間があれば、郊外バスに乗ってさらに北まで行ってみたいところだが、立場上遅くなるわけにも行かず、ここから引き返した。5号線から再び13号線に乗り換えて、東直門経由で帰ったのであるが、夕方のラッシュ時刻になって、2号環状線は東京並の混雑であった。

農村どころか、年率9パーセントの経済成長を続け、不動産バブルが云々されながらも、世界経済を牽引する中国の「発展」の一コマを見せつけられた旅であった。